

# 「悪魚退治伝説」にみる阿野郡沿岸地域と福江の重要性

乗松 真也

## はじめに

讃岐国の始祖とされる讃留靈王の由緒を語る伝説がある。この伝説は「悪魚退治伝説」、「讃留靈王伝説」などと呼ばれ、中世から近世にかけての系図や地誌などにもしばしば登場する。以下は『綾氏系図』の記載をもとに悪魚退治伝説を意訳したものである。

景行天皇23年、土佐の海に鰐のような姿をした大きな悪魚がいた。船を飲み込み、人々を食べた。また、船が転覆するため諸国から都へ運ばれるはずの税が海の中へと消えていった。天皇は兵士を派遣したものの、兵士たちはことごとく悪魚に食べられてしまった。天皇が息子であるヤマトタケルに悪魚退治を命じたところ、ヤマトタケルは15歳になる自分の息子・靈公に命じて欲しいと言った。天皇は喜び、ただちに靈公に命じた。

靈公はわずか10日で土佐に到着、そこにとどまった。悪魚は阿波の鳴門へと移動、24年1月に靈公も鳴門へ向かった。3月1日、讃岐の樋の門に悪魚が現れ、船や積んでいた税を飲み込み、人々を食べた。2日後、靈公は讃岐に移動し、軍船をつくって1,000人の兵士を集めた。

25年5月、靈公らは船を漕いで悪魚へと立ち向かうが、大口を開けた悪魚に飲み込まれてしまった。兵士は悪魚の胎内で酔って倒れたが、靈公は倒れず10日経っても平然としていた。そして靈公は胎内から火を焚いて悪魚を焼き殺し、剣を振るって肉を裂き、胎外へ出た。

悪魚の死体は福江湊の浦へと流れ着いた。そこで一人の童子が波打ち際に現れ、瓶に入った水を靈子に捧げた。靈公がこの水を飲んでみると甘露のように美味だった。靈公が「この水はどこにあるのか」と聞くと、童子は「八十場の水です」と答えた。靈公は「早く私をそこに連れて行って欲しい。そしてその水を兵士たちに飲ませ、元気にさせてやりたい」と言った。靈公と童子は水をくみ、悪魚の死体を破り、兵士に水を飲ませた。すると兵士達はすぐに目を覚ました。5月5日14時、靈公は兵士を連れて上陸した。

靈公は薬師如来の威神力で悪魚を退治することができた。靈公は病を除け九横の難を排することを誓い、浦の陸地に精舎を建てて薬師如来像を安置し、法勲寺と名付けた。以後、人々は貢物をおさめられるようになり、船舶や船員の煩いはなくなった。

童子は日光菩薩が姿を変えた横潮明神であった。この童子の姿にちなみ浦を児ヶ浜と名付けた。水は瑠璃水、瓶は薬壺であるため、薬壺水と言った。

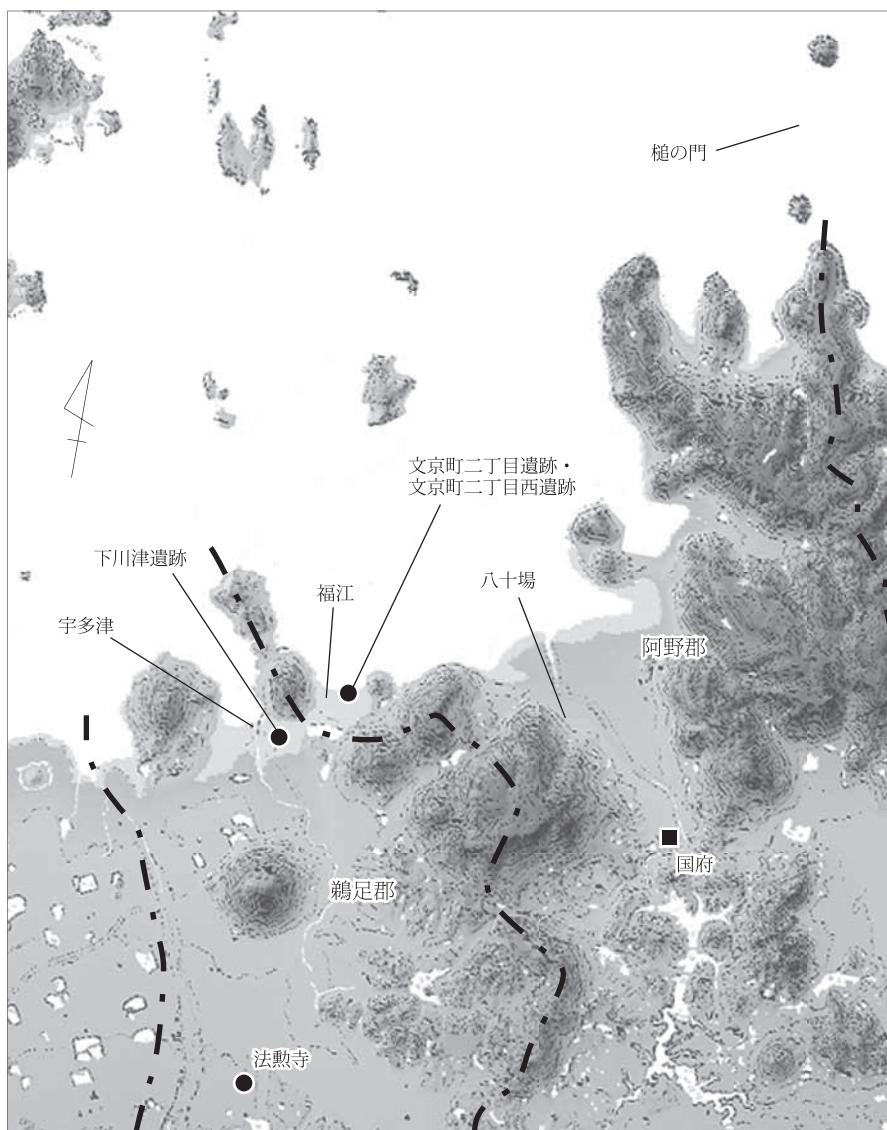
靈公は鵜足郡に移住し、兵士たちから讃留靈公（讃留靈王）と呼ばれた。また、井戸の行部、田比の里布、師田の宇治、坂本の秦胤の四人の将軍がいた。人々は彼らを四天王と呼んだ。

靈公は三男一女をもうけた。現在の首領、郡司、戸主、長者たちは、すべて三男一女の子孫である。靈公の胸には阿耶の黒点があったため、子孫は綾姓を名乗った。仲哀天皇8年9月15日、靈公は123歳で亡くなった。

悪魚退治伝説はこれまでにも研究対象として取り上げられてきた。桂孝二氏は「火」、「酔い伏すこと」、

「靈水」に着目して、『香川叢書』（昭和14～18年、1939～1943）に収録されている伝説10編を比較、検討した（桂1982・1983）。富士原伸弘氏は『香川叢書』収録の伝説をすべて書き下し、悪魚の姿や悪魚を退治する人物の比較などを行った（富士原2009）。両氏はともに諸説を比較して何かを導く研究手法であるが、比較とその結果が個別にとどまっている感は否めない。野中寛文氏は『綾氏系図』記載の伝説から古代の豪族・綾氏の「鵜足郡への進出」を読み取った（野中1990）。しかし、阿野郡に基盤をもっていた綾氏が鵜足郡へ進出したという形跡が直接古代の史料にはみえないなか、『綾氏系図』だけをよりどころにするには心許ない。

本稿では、桂・富士原両氏に倣い、中世から近世の史料に記載された諸説を比較し、特に地名に重点を置いて分析する。地名の分析から、伝説を伝え聞いてきた人々が共有していた空間範囲や重要視された場所を明らかにする。さらには野中氏が指摘した綾氏の動向についても考えてみたい。



第1図 関連地位置図 (S=1/130,000)

## 1 分析対象となる史料

前述のとおり、悪魚退治伝説は中世から近世にかけての複数の史料に記載されている。このうち最も古いとみられるのは『綾氏系図』である。『綾氏系図』は景行天皇に連なる綾氏の系図であり、その前段に綾氏の成立にかかわる悪魚退治伝説が掲載されている。成立時期は15世紀中葉から17世紀後葉と考えられている（野中1990）。新しい史料は下限を明治2年（1869）とする『讃岐国名勝図会』である。また、成立時期は不明ながらもおおむね近世のものと考えられる3点の史料がある。

これらの史料に記される諸説では、讃留靈王、もしくはヤマトタケルが讃岐の海で悪魚を退治して讃留靈王が讃岐国を治める、という根幹のストーリーは共通する。悪魚の形容や退治方法など記述が異なる部分があり、エピソードの有無もみられる。『綾氏系図』と鳴田寺本「讃留靈公胤記」の記述はほとんど同じであり、同一の記録を参照しているか、『綾氏系図』を参考に鳴田寺本「讃留靈公胤記」が作成されたとしか考えられない。細部にある若干の相違を考慮すれば、前者の可能性が高い。また『綾北問尋鈔』（宝暦5年、1755）では、「一説に曰」として一部異なる話が記される。『南海通記』（享保4年、1719）は「綾讃留王記」として伝説を記述した後、「綾姓系譜曰」として『綾氏系図』にある伝説を述べる。これらは史料成立時点においても諸説あったことを示している。以上の点を踏まえると、中世以前、後述するように綾氏との関連で伝説を捉えるならば古代までを含めたイメージが、さまざまなかたちで諸説に残存しているとみられる（註1）。よって諸説を合わせて検討することで、伝説の背景を探ることができると考える。

なお、『南海通記』にある御供所の由来や、63人の兵が福江山に登り植松姓を名乗るくだり、船長の楫取の大明神との呼称は『全讃史』（文政11年、1828）に引き継がれる。『全讃史』では1000人の兵のうち800人が八十場の水で蘇生したとしているが、これは『綾氏系図』などによる1000人の兵と八十場の由来である「8」の数字を合理的に説明するために創作された可能性がある。『讃岐国名勝図会』では悪魚退治伝説そのものに疑いの目を向けており、その視点で伝説が紹介されている。このように、19世紀以降の史料については、それまでの記録を参考にしたうえで内容の取捨選択、改変が目立つものもある。しかし、伝説にかんする情報が断片的にでも入っている可能性を考慮し、これらの史料も積極的に分析対象として使ってみたい。

## 2 諸説の比較

諸説を要素ごとに比較したのが第1表である。要素により異同にはらつきがある。ここではおおむね共通する項目を挙げてみたい。

悪魚出現地には土佐、鳴門、水崎などが登場するが、『綾北問尋鈔』を除く12史料に共通するのが樋の門（樋門、樋途など）である。同じ12の史料では、讃



写真1 樋の門

1 羽床正明氏は、『南海通記』に記された「綾讃留靈記」と『無量寿院縁起』は14世紀に法勲寺の僧が作成した伝説が基になっているとする。さらにその伝説は『日本書紀』を下敷きにしているという（羽床1998・1999）。伝説にバリエーションがあることからすれば、すでに伝説の諸説が伝わっており（必ずしも記録という形式ではなく）、ある段階で法勲寺に関係の深い人物がそれらをまとめたとみるのが妥当ではないだろうか。

第1表 要素比較表

	『綾氏系図』	『讃岐国大日記』	『南海通記』	鷲田寺本 「讃留靈公胤記」	『綾北問尋鈔』	『三大物語』
成立年	15c中葉～17c	1652	1718	1735	1755	1768
悪魚を退治する人物	靈公	靈子	小碓尊	靈子	小碓皇子	倭建尊
悪魚の形容	鰐	鷲鷦	鰐、鷲崖	鰐	—	—
悪魚出現地	土州、鳴戸、椎門	土国、鳴門、椎の途	土佐、鳴門、椎の門、水崎	土佐、鳴途、槌途	讃岐の海	土佐、鳴門、椎の門、水崎
造船の場所	—	—	阿野川の上	—	—	—
悪魚と対峙する場所	椎門	椎の途	椎の門	槌途	讃岐の海	椎の門
率いる兵士数	1000余人	1000余人	63人	1000余人	80人	80人
悪魚退治の方法	胎内から火で焼く	胎内から剣で切り破る	火のついた船を呑ませ、胎内から剣で刺す	胎内から火で焼く	胎内から剣で切り裂く	悪魚に火のついた船を呑ませる、刃で刺す
悪魚が流れ着く場所	福江湊浦	福江の浦	福江	福江の浦	福江・児カ浜	福江の浦
兵士が倒れる場所	悪魚胎内	悪魚胎内	福江	悪魚胎内	福江・児カ浜	福江
童子出現地	福江の浜	福江の浦	福江	福江の浜	福江	福江
児浜の由来	あり	—	—	あり	あり	—
児ヶ嶽の由来	—	—	—	—	あり	—
蘇生の水の場所	安庭	安場	樵夫の休み場→八十庭	安庭	安庭	八十蘇
八十場の由来	—	—	あり	—	80人	80人
横潮明神建立地	—	—	—	—	童子が乗った白雲の留まるところ	—
悪魚の死骸の処理	—	村人が悪魚の死骸を切り分ける	—	—	—	—
悪魚の靈の処理	福江の浦に法勅寺を建立	魚の御堂建立	屍を砂に埋めて木を植えた、後に魚靈堂を建立	福江の浦に法勅寺を建立	450年後、行基が骨で薬師如来をつくる、魚御堂または法軍寺	—
上陸地	陸地	鶴足津	陸地	—	—	—
その後の居住地	鶴足	香西	—	鶴足	城山	—
生存年数	125	—	125	123	—	125
葬られた場所	—	—	—	—	鷲田	玉井
子ども、子孫	3男1女、子孫が要職を占める	—	—	3男1女、子孫が要職を占める	—	—
將軍	4人の將軍	—	—	4人の將軍	—	—
綾氏との関係	祖先、綾氏の由来	—	—	祖先、綾氏の由来	—	綾の始祖
御供所の由来	—	—	平山漁人の提供	—	—	—
兵士のその後	—	—	63人の兵が福江山に登り松を植える、植松姓を名乗る	—	—	—
船長・船員のその後	—	—	船長は指取の大明神と呼ばれる	—	—	—
讃留靈王の呼称	靈公→讃留靈公	靈子→讃留靈公	武殿王→讃留王	靈子→讃留靈公	靈公→讃留靈親王	武殿王→讃留王→武明王
その他			当初、播磨武夫が命じられる		当初、播磨武夫が命じられる	
			吉備武彦の娘との間に子をもうける		吉備武彦の娘との間に子をもうける	
			功績を讃靈王に譲る		功績を讃靈王に譲る	功績を讃靈王に譲る
					別の説としてヤマトタケルが吉備武彦の娘との間に靈公をもうけることが記される	
					法軍寺を福江から鷲田に移す	
					別の説では槌ノ途に悪魚が現れる	
					別の説では靈公を武明王とも武殿王とも呼ぶ	

『全讀史』	『金毘羅參詣名所図会』	『西讀府史』	『讀岐国名勝図会』	豊原道隆寺本 「讀留靈公胤記略」	中尾本 「異本讀留靈記」	『讀陽綱目』
1828	1847	1858	1853～1869	?	?	?
武鼓王	日本武尊	神櫛王	日本武尊	靈公または神櫛尊	靈子	大碓命（讀留靈公）
嶼	—	—	—	島、鰐、鰐口龍尾	鰐	嶼嶼
椎の門	椎戸	土佐、鳴門、権門	椎門、阿波、伊予	土州、鳴渡、権の渡	土佐、鳴門、椎の途	四国の海、椎の戸
—	阿野の山邑の木で造船	—	—	—	—	—
椎の門？	椎戸	—	—	権の渡？	椎の途	椎の戸
1000人	—	1000余人	—	1000人	1000余人	80余人
胎内から劍で切る	鉢・劍で斬る	—	—	—	胎内から火で焼く、劍で破る	劍で裂く
福江の浦に悪魚の死骸を埋める	福江	福江の浦で悪魚を倒す	福江の浦で悪魚を倒す	福江に悪魚の死骸を埋める	福江の湊	福江の磯辺
胎内	福江	福江の浦	?	海上？	胎内	福江
福江	福江	—	—	福江の浦	福江の浜	福江
—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—
八百蘇波→八十蘇	樵夫の休み場→八十生・八十八	—	八十蘇	安場→八十蘇	安庭	八蘇場
800人	80人または88人	—	80人	80人	—	80余人
—	—	—	童子が乗った白雲の留まるところ	魚御堂の東の山の中腹	—	—
—	—	—	—	—	官吏と村人が悪魚の死骸を切り分ける	—
魚靈の御堂を建立	魚御堂を建立	—	魚御堂を建立	魚御堂の建立（ただし靈はない）	—	—
—	陸地	—	—	—	鶴足津	—
—	—	城山	—	香川郡	鶴足津	—
115	—	—	—	122	125	—
鼓丘	—	—	—	—	—	—
—	—	子孫は代々山田郡に領地をもつ	—	—	—	—
—	—	—	—	4人の將軍	4人の將軍	—
—	—	—	—	—	祖先、綾氏の由来	—
漁人の提供	浦人の提供	—	あり	—	—	—
63人の兵が福江山に登り松を植える、植松姓を名乗る	—	—	—	—	—	—
舟子の祠を楫師大明神とする	—	—	—	—	—	—
武殿王→讀留靈王	武殿王→讀留王	神櫛王→讀留王	—	靈公・神櫛尊→讀留靈公	靈子→讀留靈公→讀留天皇	大碓命→讀留靈公
—	—	—	—	—	—	—
江口、江尻の地名の由来	穴戸武媛との間に子をもうける	—	—	—	—	—
—	功績を讀留靈王に譲る	—	功績を讀留靈王に譲る	—	—	—
—	—	大伴建日・吉備武彦の二人の将を伴う	伝説を疑う	—	—	悪魚の死骸が山（松山）になる
—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—

留靈王もしくはヤマトタケルが悪魚と対峙する場所も樋の門となっている。樋の門とは小規模な円錐形の2島——大樋島と小樋島に挟まれた海峡を指す。その独特的の景観のためか、樋の門にはさまざまな逸話が残されている（田井2002）。特別な地としての意識が悪魚出現の舞台として樋の門を選ばせたのだろうか。

退治された悪魚が流れ着く場所は9史料で福江とされている。残りの4史料でも福江に悪魚の死骸が埋められる、または福江で悪魚が倒される、となっている。すなわち、悪魚の最期の地は福江、ということになる。福江は、西の金山・常山、東の角山に挟まれた現在の坂出市福江町周辺を指す。それぞれの史料で福江の浦、福江の磯部といった表現が使われているよう、近世の埋め立て以前には大きく湾入り、瀬戸内海に面する地であった。

童子の姿をした横潮明神は11史料で登場し、いずれも福江の浜に現れる。

その童子が持ってくる蘇生の水は12史料で八十場（安庭、八十蘇など）の水となっている。現在の坂出市西庄町にある八十場の湧水は、『金毘羅參詣名所図会』（弘化4年、1847）で「國中第一の清水」と評されており、近世には広く知られていたようだ。

以上、多くの史料で共通するのは、樋の門、福江、八十場の地名である。これらの地名を地図上でみると阿野郡の沿岸地域に点在していることがわかる（第1図）。伝説の伝承が、必ずしも記録によらないのであれば、伝えられる側が地名の示す場所をある程度把握していないと、次へ伝えられる可能性は少なくなる。つまり、この伝説が伝わった地域では、少なくとも樋の門、福江、八十場の地名とその位置関係が広く共有されており、この3地点を結ぶ阿野郡沿岸地域が人々の「最大公約数」的な空間範囲としてイメージされていたと推測できる。

さらに悪魚退治伝説では福江で複数のイベントが発生する。悪魚の死骸がなんらかの理由で福江にあり、横潮明神の化身である童子が現れて倒れた兵士を蘇生させ、魚御堂、もしくは法勲寺が建立される。『南海通記』などでは讚留靈王が悪魚退治後に上陸する地名は記されていないものの、文脈からは福江であるようにも読み取れる。これらの点からは福江が伝説における最重要地とみられる。

### 3 福江に所在する遺跡と下川津遺跡の検討

前述のとおり、福江は現在の坂出市福江町を遺称地とする。木下晴一氏は、角山北東麓から西に伸びる浜堤（「浜堤A」とする）前縁を縄文海進時の海岸線とし、以後の陸地化も遅く、古代にも浅海が広がる景観を復元する（木下2009）。『玉藻集』（延宝5年、1677）には天正7年（1579）、香川民部少輔が宇多津を経由して西庄城に戻るくだりがあり、ここでは「中道」と呼ばれる海側の浜堤（「浜堤B」とする）が

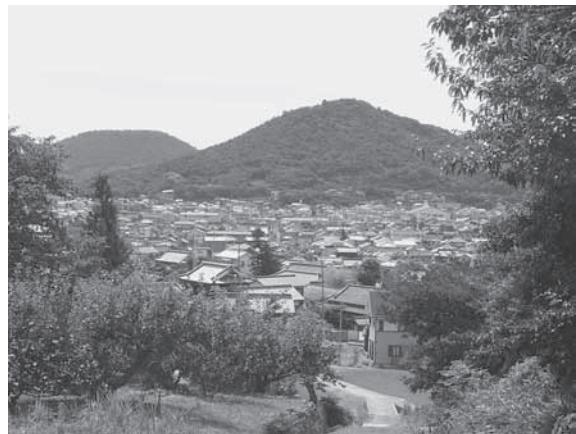
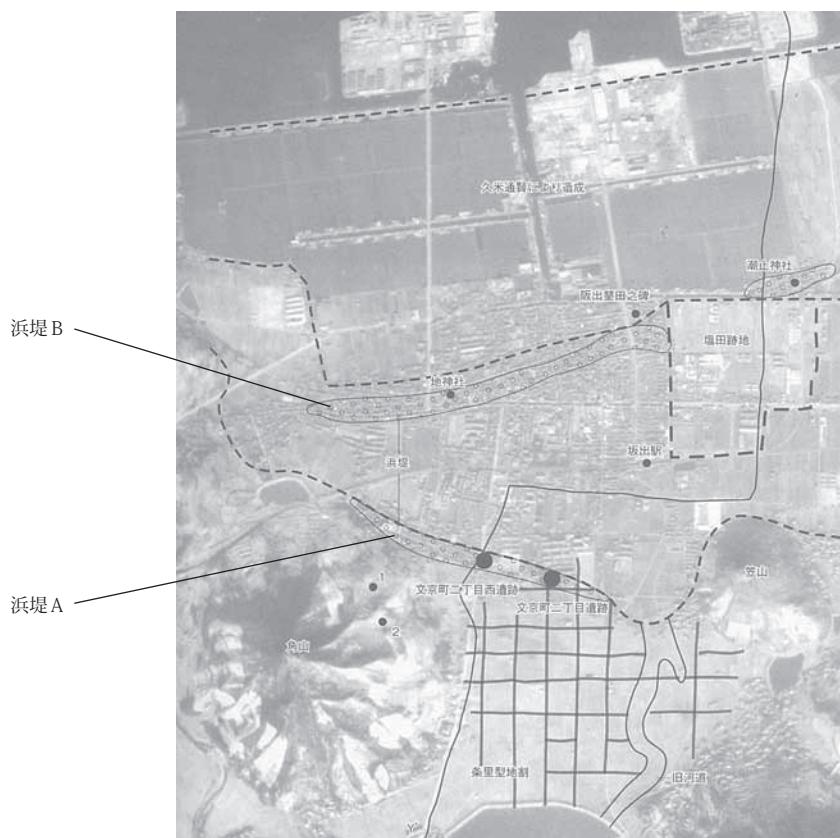


写真2 福江

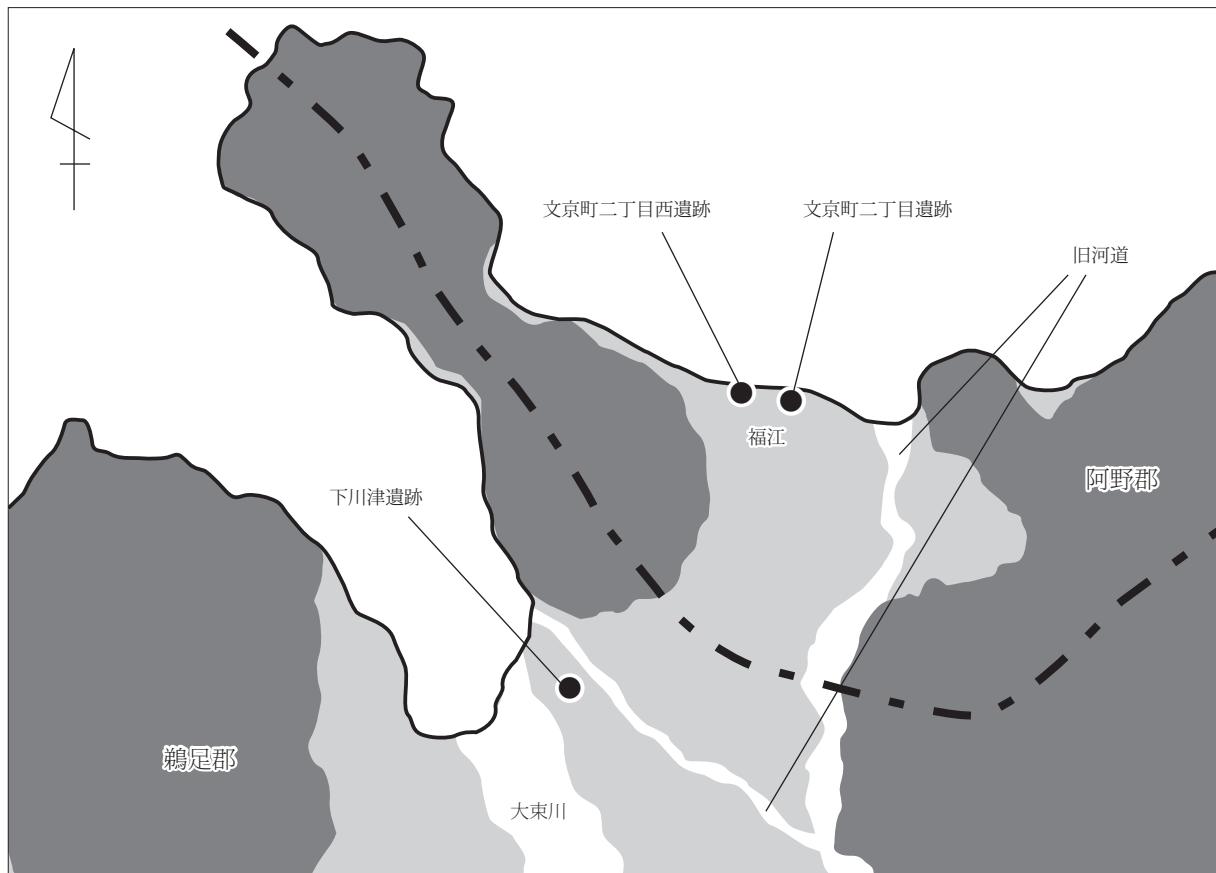


写真3 八十場



※木下2009を一部改変

第2図 福江周辺地形復元図



第3図 遺跡位置図 (S = 1/25,000)

表2 遺跡消長表

遺跡名	6 c	7 c	8 c	9 c	10 c	11 c
文京町二丁目・文京町二丁目西	■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■
下川津	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■

※文京町二丁目・文京町二丁目西遺跡は遺物の相対的な出土量を濃淡で示している。  
下川津遺跡は遺構・遺物を合わせた総合的な性格を濃淡で示している。

ようやく渡ることが可能な状態であること、「中道」と陸地側の浜堤Aとの間が足も立たない「深江」であることが記されている（註2）。

さて、浜堤Aには文京町二丁目遺跡と文京町二丁目西遺跡がある（西岡ほか2002、木下2009）。文京町二丁目遺跡からは備讃VI式の製塩土器と製塩炉の存在を推定させる被熱の状況が確認されている。備讃VI式は6世紀後葉～7世紀中葉に比定されるが、中心は7世紀前葉以降である（大久保1994）。また、8世紀の須恵器も出土している。文京町二丁目西遺跡では、浜堤前縁から8世紀中～後葉を中心とする土器が、その前面の堆積層からは畿内産とみられる9世紀の緑釉陶器や中世後半までの土器が出土している。また、浜堤前縁ではまとまった量の飯蛸壺が確認されている。8世紀のものが多数を占めるが、7世紀後葉の特徴を有する資料もある（乗松2004）。出土状況からは飯蛸壺漁が行われていたとみてもいいだろう。両遺跡の調査成果によれば、陸地側の浜堤上では7世紀前半を中心とする時期に製塩活動が行われ（開始は6世紀後葉にさかのぼる可能性もある）、やや地点を違えて7世紀後半に飯蛸壺漁が開始、8世紀までは継続される。この間、8世紀中～後葉には、生産用具（飯蛸壺）に加えて日用雑器（須恵器など）が多くみられるようになる。量は減少するものの、日用雑器の出土は中世後半まで続く。遺構が確認されていないため具体的な内容は不明だが、東西を山に挟まれて北向きに湾入する復元景観を含めて考慮すれば、8世紀中葉以降には港湾機能をもっていたとも考えられる。なお、『綾氏系図』には「福江湊浦」とあり、少なくとも『綾氏系図』成立期（中世後半～近世初頭）には福江が港として認識されていたようだ。

両遺跡のある浜堤Aから約1.5km南西、大東川下流の右岸には下川津遺跡が立地する（藤好ほか1990）。古代以前には遺跡の直近まで海岸線が湾入し（佐藤1998）、大東川の河口に近い場所であったと思われる。遺構が展開するのは、東西を低地帯に挟まれた四つの微高地上である。6世紀後葉に集落が出現し、7世紀中葉には建物が急速に増加、企画性をもつ大型建物も現れる。8世紀後半から9世紀中葉にかけて集落規模が縮小するものの、9世紀後葉以降には再び建物群がみられるようになる。建物規模や配置の企画性などから、7世紀～8世紀中葉、および9世紀後葉～10世紀前半には官衙的な性格を有する。また、7～8世紀には土師器や飯蛸壺の製作、鍛冶、紡織などの諸生産活動が行われることを特徴とする（佐藤1998）。

ここで浜堤Aと下川津遺跡を合わせて概観してみよう。下川津遺跡に集落が出現した時点、またはやや遅れる時期に浜堤Aは製塩の場であった。下川津遺跡が官衙的性格をもつ7世紀後葉～8世紀中葉には浜堤Aで飯蛸壺漁が行われると同時に港湾機能が充実されたとみられる。「断絶期」を挟み、再び官衙的性格が下川津遺跡に付与された9世紀後葉以降も、8世紀段階ほどではないが浜堤Aは継続して利用されたようだ。遺物量や集落の性格のピークに多少のズレはあるものの、7世紀から中世まで両者が共に継続することをここでは重要視したい（第2表）。前述のとおり両者の間は直線距離で約1.5kmしかなく、途中に旧河道を挟むものの地形的に大きな障壁がない。これらの点を考慮すれば、両者の間には高い関連性が

2 福江の地名は深い江、深江が転じたものとされる（藤田1989）。

あったとみるのが自然だ。

#### 4 阿野・鵜足両郡の媒介地としての福江

さて、福江の検討を踏まえて再び悪魚退治伝説をみてみよう。悪魚退治伝説は『綾氏系図』に記され、主人公である讚留靈王もしくはヤマトタケルは綾氏の祖先とされる。このことから、悪魚退治伝説が綾氏にゆかりが深い点は間違いないだろう。『日本書紀』、『続日本紀』などの史料からみれば、綾氏は少なくとも7世紀後半には有力豪族であり、8世紀にかけて阿野郡で大きな力を持っていたと考えられている（渡部1998）。国府が阿野郡に設置された背景には綾氏の政治力の影響をみる向きもある（大山2010）。伝説の諸説の多くに共通する樋の門、福江、八十場がいずれも阿野郡にあるのは、伝説と綾氏との関連性を裏付けるものとみてよい。

一方、野中氏は『綾氏系図』にある法勲寺や鵜足郡の地名（註3）には、綾氏の「鵜足郡への進出」が表現されているとする（野中1990）。『綾氏系図』以外にも、鵜足郡関連の事項が登場するものがいくつもある。『綾氏系図』に酷似する嶋田寺本「讚留靈公胤記」にも讚留靈王が鵜足に居住したとあり、『讚岐国大日記』では讚留靈王が鵜足津（宇多津）へ上陸したとする。また嶋田寺本「讚留靈公胤記」では法勲寺が登場し、『綾北問尋鈔』でも悪魚の靈を鎮めるために魚御堂または法軍寺を建てたとある。法勲寺は鵜足郡の内陸部に位置する丸亀市飯山町上法軍寺・下法軍寺を遺称地とする。この地には飛鳥時代～奈良時代初期の建立とされる寺院跡があり、この寺院跡が古代の法勲寺であった可能性は高い（註4）。『讚岐国名勝図会』では同地を法勲寺跡とし、福江にあった魚御堂を移して法勲寺とした旨の文を『宇野忠春記』から引用する。一部の伝説にしかみられないとはいえ、讚留靈王の居住地や上陸地、法勲寺跡の立地といった事項からは、野中の指摘どおり綾氏と鵜足郡との関係を読み取ることができる。

さらに福江の位置づけも同様に捉えたい。古代の阿野郡には、福江のほかに現在の綾川河口付近（坂出市林田町）にも港湾施設があった可能性がある（西村・佐藤2012）。これらの位置を比較すると福江は阿野郡でも西端に位置し、国府との距離もややある。しかし、3で検討したように福江は鵜足郡へのアクセスが容易な地であり、鵜足郡を流れる大東川下流域との関係も深そうだ。つまり、悪魚退治伝説で福江が重要視されているのは、福江が阿野郡と鵜足郡を媒介する地であるためと考えられる。綾氏が阿野郡に本拠地をもちながらも鵜足郡への影響を強めていたとするならば、伝説の中で福江が強調されていても不思議ではない。

#### おわりに

本稿では、悪魚退治伝説諸説に共通して登場する阿野郡沿岸地域を、伝説の伝承に関わった人々が共有していた空間範囲と推測した。また阿野郡沿岸地域の中でも特に重要なのは福江であり、福江が阿野・鵜足両郡を媒介する場所であった可能性を指摘した。それはさらに、直接古代の史料にはみられないものの、綾氏の鵜足郡への関与が伝説の背景にあると考えた。

3 福江も鵜足郡とされているが、『南海通記』に「阿野の福江」、『讚岐国名勝図会』に「阿野郡福江浦」などとあることから福江は阿野郡に属すると考えていいだろう。

4 安藤文良氏は『綾氏系図』に法勲寺が登場することを根拠に、法勲寺が綾氏の氏寺の可能性を指摘している（安藤1988）。また川畑聰氏は、『綾氏系図』の記述に加えて、法勲寺跡と開法寺跡から同文の軒瓦が出土していることを挙げて綾氏と法勲寺との関係を考えている（川畑聰1996）。国府に近接する開法寺は阿野郡にあり、綾氏との関連が深い寺院とされる。

本稿を作成するにあたり、悪魚退治伝説にみられる地名をもとに古代から中世にかけてのイメージを構築する佐藤竜馬氏の視点は大変参考になった。

#### 文献

- 安藤文良 1988 「氏族と氏寺」『古代の讃岐』 美巧社
- 大久保徹也 1994 「古墳時代以降の土器製塩」 近藤義郎編『吉備の考古学的研究（下）』 山陽新聞社
- 大山真充 2010 「讃岐国府の成立前夜」『讃岐国府跡を探る』 香川県埋蔵文化財センター
- 桂 孝二 1982 「讃留靈王伝説考（I）」『香川大学一般教育研究』 22
- 桂 孝二 1983 「讃留靈王伝説考（II）」『香川大学一般教育研究』 23
- 川畠 聰 1996 「讃岐における瓦の展開」『讃岐の古瓦展』 高松市歴史資料館
- 木下晴一 2009 『都市計画道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 木太中村遺跡 文京町二丁目西遺跡』 香川県埋蔵文化財センター
- 佐藤竜馬 1998 「讃岐における官衙関連遺跡と集落動向」『古代学協会四国支部第12回大会発表資料 律令国家における地方官衙遺構研究の現状と課題 一南海道を中心に一』 古代学協会四国支部
- 田井静明 2002 「讃岐の「二大異界」—椎門と志度—」『特別展「あの世・妖怪・占い—異界万華鏡—」展 地域展図録 讃岐異界探訪』 香川県歴史博物館
- 西岡達哉ほか 2002 「文京町2丁目遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報 平成12年度』 香川県教育委員会
- 西村尋文・佐藤竜馬 2012 「綾川河口域における開発史—古代から中世の村田郷周辺—」『香川県埋蔵文化財センター研究紀要』 VIII 香川県埋蔵文化財センター
- 野中寛文 1990 「讃岐武士団の成立 —『綾氏系図』をめぐって—」『四国中世史研究』 創刊号
- 乗松真也 2004 「備讃瀬戸および沿岸地域の飯蛸壺」『香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要』 X I 香川県埋蔵文化財調査センター
- 羽床正明 1998 「金毘羅信仰と權少僧都宥雅 —無量寿院縁起を中心として—」『文化財協会報 平成9年度 特別号』 香川県文化財保護協会
- 羽床正明 1999 「金毘羅信仰の成立に就いて」『文化財協会報 平成10年度 特別号』 香川県文化財保護協会
- 富士原伸弘 2009 「讃留靈王伝説についての考察」『詫間電波工業高等専門学校研究紀要』 37
- 藤田一郎 1989 「坂出市」『日本歴史地名体系第38巻 香川県』 平凡社
- 藤好史郎・西村尋文・大久保徹也 1990 『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 VII 下川津遺跡』 香川県埋蔵文化財調査センター
- 渡部明夫 1998 「考古学からみた古代の綾氏（1）—綾氏の出自と性格及び支配領域をめぐって—」『香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要』 VI 香川県埋蔵文化財調査センター

※挿図の一部はカシミール3Dを使用した。